共同研究者の部屋

「ガヤガヤの向こう側にあるもの」

戸澤由美恵（高崎健康福祉大学准教授）

福祉専門職は「正解のない問い」に向き合う仕事

私は、社会福祉専門職を希望する学生の教育という仕事をしています。彼ら彼女らが目指すのは、社会福祉士や精神保健福祉士、介護福祉士といった国家資格の取得であり、相談援助や介護の提供等を通して誰かの支えになることです。その人の幸福を願い、その人の人生に関わり手助けをするということは、その人と一緒に、時にはその人の代わりに生きる道筋を立てていくことになります。そのような「正解のない問い」に向き合うとき、自分（や家族や組織や制度）にとって都合の良い答えを無意識に正解としていないか、自問自答して行くことが必要です。そこには、常に「人権」というものを意識した関わりが求められることを、学生には伝えなければならないと考えています。とはいえ、「言うは易く行うは難し」です。到底自分にはそのような力はなく、その役目をお願いしているのが、ハンセン病回復者の方々なのです。

ハンセン病回復者との交流

私の学びを得る方法とフィールドは、療養所の内外に暮らすハンセン病回復者やその家族との交流であり、草津町の国立療養所栗生楽泉園です。今年は、強制隔離と差別・偏見を助長しその患者や家族たちに大きな人生被害をもたらした「らい予防法」の廃止から 20 年、「頭の上にかかっていた大きな網が、ぱっととられた感じがする」という感想を回復者からお聞きしました。それまでは、ハンセン病（らい病）という言葉は文学上のものでしかなかった私が、直接的に関わるチャンスを頂いて以来、入所者のお宅に伺うようになりました。今は、ゼミの学生まで連れてお邪魔しています。

学生たちとガヤガヤ、ガチャガチャ

ここまで読んで、みなさんの気持ちはさぞ重くなったことでしょう！？いつもそんな真面目で重いことばかりを考えて行動しているわけではなく、要はハンセン病問題を学びのベースにして、学生たちとガヤガヤと何かをしているだけなのです。楽泉園には毎年見学に行き、入所者のお宅に上がり込んで、これまでの生活をお聞きしたり、一緒に腕相撲や将棋をしたりします。3･11 以降は、入所者自治会の要請で福島の子ども達を招いての保養･人権学習キャンプ（今年は 8/2･6）のお手伝いもするようになりました。《表紙写真参照：編集部注》

楽泉園入所者Ｙさんと腕相撲

昭和一桁生まれの Y さんは、全盲ですがとても健康に気をつけていてお元気です。Y さんとは、一緒にお散歩したり、写真のように腕相撲で盛り上がりました。子どもたちは、手を握って、素晴らしい笑顔で本気で闘ってくれます…何のためらいも偏見もなく。私も指名されて戦い、おかげで、筋肉痛でした（＞＜）

自費で各地の療養所訪問

ここ数年、ゼミ生たちとの各地の療養所訪問がブームになっています。それは、学生の「楽泉園以外の療養所も知りたい」という一言から始まりました。学生の自費での参加ですし、初めてのことなので、日帰りできる東京なら…と、知り合いの退所者にお願いし、ハンセン病資料館と多磨全生園の見学・説明、療養所内の食堂で昼食をとりながらご自身のお話も聞かせていただきました。学生は、療養所が平地にあることや、敷地の中を町の人が自転車で通り抜ける姿に驚きました。私にとってはフィールドワークと比較対象のある大切さを実感し、学生は新鮮な体験と気付いたようでした。次の年は、「今年もどこか行きたいなあ…どうせなら、下調べしてから」と、訪問を前提に療養所の事前学習を後期授業に入れることを提案してきました。

沖縄愛楽園・駿河療養所

沖縄戦と米軍占領の事前学習をしたうえで沖縄愛楽園を訪れた時は、入所者自身が掘って隠れたことで後遺症を重くしたという防空壕に入らせていただきました。おじいが話すウチナーグチの聴き取りに難儀しながら変形した手でひく三線に聴き惚れました。

おじいは三線の名手

終われば美ら海水族館や浜辺と沖縄料理で大はしゃぎ！

3年目は、(戦争中にハンセン病を発症した）傷痍軍人のために作られた駿河療養所（静岡県）に行き、療養所の眼下に見える自衛隊の演習場から響く大きな音と振動に驚きと皮肉を感じながら、入所者の「忘れないで欲しい。誰かの役に立ちたい」という切ない声をきかせていただきました。翌日は小雪ちらつく富士サファリパークで猛獣へのエサやりを楽しみ素敵なペンションで地ビールに舌鼓♪

学生同士の交流の機会でもある（右奥が筆者）

旅程、宿泊の手配、すべて学生が

時期は、4年生の国家試験と在校生の後期試験が終了し、入試業務が一段落した2月に、ゼミのまとめ的に実施しています。2年目からは、旅程を学生が決め、3年生が交通手段や宿泊の手配を担当するようにしました。実習や就活、費用負担の関係でゼミ生全員とまではいきませんが、4年生は卒業旅行感覚で楽しむようになりました。

生きた証を残したい

入所者の多くが園名を名乗り、治っても療養所からは退所できず、亡くなってからも家族の元に帰れません。…誰もが生きた証を残したいと思っていることでしょう。未来のある学生には発症した頃のご自分を重ねるのか、みなさん、様々なことを語ってくださいます。果たして彼女、彼らの中に、入所者の思いがどれほど届くものか？…福祉従事者としての仕事に期待しつつ、日々、ガヤガヤと何かをしております。